2009年（平成21年）
第17号
（5月15日）

平安月報

The HEIAN monthly report

発　行　所：立正佼成会　京都教会
発行責任者：渉外部長　宮地啓安
〒605-0041　京都市東山区三条蹴上
TEL (075)762-2211　FAX (075)762-2266

京都教会５０年の歩み（４回目）

５０周年を迎えた京都教会のこれまでの歩みを紹介します。

■２代目、岡部教会長へのバトンタッチ

昭和４３年１月、諸井教会長の後任として、岡部晃章（故人）が２代目の京都教会長（当時、支部長）として就任した。岡部教会長は就任直前まで神戸教会長（当時、支部長）として活躍していた。

岡部教会長は、「直接会員宅を訪ね歩いて十分に話し合う」という方針のもと、地区の末端にも及ぶ、ひたむきな布教活動が展開された。また、壮年部活動や夜間法座も大きく充実した。

■京都支部から京都教会に

昭和４４年１月、教団の新体制施行に伴い、京都支部から「京都教会」へと名称が変わり、法座も支部と呼び名が変えられた。当時の京都教会は、中京支部、左京支部、右京支部、亀岡支部の４支部体制となり、新たな時代を切り開くために更なる躍進を期して、歩みはじめたのであった。

■３代目、滝口教会長の就任

昭和４４年１２月、岡部教会長の後任として、滝口晃央（故人）が３代目の京都教会長として就任した。

滝口教会長は、昭和２８年に横浜支部に入会。その後、３５年に横浜支部主任、昭和３９年に横浜第２支部長、４１年に小田原支部長、４３年には本部儀式行事課長を歴任した。

滝口教会長が就任した翌年の昭和４５年１０月には、京都宝ヶ池の国立京都国際会館で世界３９カ国から、宗派を超えた宗教者２８６人を集めて、人類史上画期的と言われた「第１回世界宗教者平和会議（ＷＣＲＰＩ）」が開催された。

■ＷＣＲＰをきっかけに活動範囲が大きく広がる

滝口教会長は就任忽々、この人類史上未曾有のＷＣＲＰの受け入れを託されながらも、教会の運営方針を「足もとからの実践」と「会員の主体性の尊重」と位置づけ、地道な会員指導を始めた。そして、信仰の裏づけとなる教義教育にも力を入れ、会員、幹部の人材育成に努めるとともに、地区末端に根ざした布教活動の充実を推進した。

加えてＷＣＲＰをきっかけに、平和社会活動を推進するなど、活動が広範囲に及んでいった。

一食を捧げる運動

３月２７日に日本を出発した「ゆめポッケ親子ボランティア隊」の一行２７人が４月２日、訪問先のフィリピン・ミンダナオ島から帰国した。ミンダナオ島では、キリスト教系住民と先住のムスリム系住民との間で土地や自治権をめぐる対立が続いている。１９６０年以降は政府軍と反政府組織との間で武力衝突が相次ぎ、現在２０万人以上が避難生活を強いられている。同国の子供たちにポッケが配布されるのは今年が初めてだ。一行は現地ＮＧＯ（非政府機関）のＭＣＬ（ミンダナオ子ども図書館）の協力を得て、山間部にある二つの村を訪問。子供たちに２０９個のポッケを手渡すとともに、歌や絵本の読み聞かせを通して交流した。また、一行はＭＣＬが奨学生のために運営する寮に２泊し、寮生活を送る子供たち約６０人と触れ合った。

京都教会においても今年度の未使用の文房具などの受付がもうすぐ始まります。ご協力下さい。

時事刻々

日本アイスクリーム協会が発表した「アイスクリーム白書２００９」に面白い調査があった。

「家でくつろぐとき、誰と過ごすか」という質問に対して、男女ともトップは「ひとりで」だった。しかし、２番目から男女差が出ている。

男性が家でくつろぐときは②「恋人・配偶者と」、③「子ども・親と」なのだが、女性は②「子ども・親と」③「恋人・配偶者」の順だった。

かつて、「濡れ落ち葉」という言葉が流行った。定年退職後、仕事人間だった夫が家では邪魔な存在になるということを表したものだ。

家でパートナーとくつろごうとしている夫だが、妻は親子がよいという。協会はこれを結婚しても実家で同居するサザエさんファミリー現象といっている。

仏教に夫婦のあり方を説いた教え（六方礼経）がある。これを学んだ夫婦はどう答えるのだろうか。

諸宗教対話　～開祖の願いをこの京都の地に～

宗教協力

新日本宗教連盟京都府協議会に新たな動きが芽生えだした。先日開催された懇親会の席上で本会の中村教会長より、新宗連京都府協議会の次代を担う青年が今こそ集い共に行動するときではないかとの呼びかけに、参加されていた教団の代表の皆さんより賛同をいただき、いよいよ新宗連京都府協議会に青年部会が発足することが満場で決定した。

今こそ立正佼成会開祖の願いである宗教協力による世界平和実現を私の修行目標として動き出す第一歩の日となった。新宗連にはもともと青年の集まりとして『新日本宗教青年会連盟』が昭和３６年に発足し、近畿では青近連として参加教団の青年たちが親しく交流し、活動を重ねてきた。

青年会連盟は「宗教青年がその教義や信条の相異を乗り越えて『世界の平和』『人類の幸福』のために大きく手を携える、また新宗連以外の宗教青年とも相共していくこと」を目標として活動を展開している。この取り組みが、いよいよ京都の地で宗教青年が共に動き出すときが来た。

新宗連京都府協議会の先生方は本当に素晴らしい宗教者ばかりで、宗教協力と私たち青年に掛ける思いは本会の開祖や会長と全く同じである。そして、諸先輩が築き上げられた輪を宗教青年がますます広げていくことが大切である。年内は各教団の青年代表者との出会いを重ね、宗教青年として協力できることを見出し、来年から本格的に取り組む予定だ。

私のほのぼの日記（京都佼成議員懇話会に参加いただいている議員さん方のコーナーです）

憲法記念日に

京都市議会　山本　恵

幼少の頃、教会の子供集会に参加し、クリスマスプレゼント(ノート等)を貰うのが楽しみだった。小学生の頃、選挙車の演説を聞き、車の後を追いかけ、浅沼稲次郎氏の暗殺風景や樺美智子さんの死や国会を取り巻くデモ、岸信介首相の演説を白黒テレビに見入っていた。中学生の頃、ケネディ大統領暗殺があり、また弁論大会で上級生の在日朝鮮人、除俊植さんの弁論を聞き差別を実感した。高校生の頃、ベトナム戦争やキング牧師の暗殺があり、世の中の不条理に対して怒りを抱いた。当時、生徒会の副会長や地域のボランティア活動をしていたが、政治の根本からの変革無くして社会は変わらないと思い、大学生になり学生運動や地域紛争に参加した。月日は過ぎ価値観、歴史観は変化し、世界も変わった。そして平和に対する意識も溶解している。しかし変えてはいけない事もある。

マスコミの影響力

京都市議会　藤川　剛

これまで百年に一度と言われた未曾有の世界金融危機に加え、マスコミをにぎわせているのは新型(豚)インフルエンザです。これにより海外旅行をキャンセルしたり、また豚肉を扱う食品関係の需要が減っているというニュースも耳にしました。経済の冷え込みが懸念されますが、この一端はいわゆる風評被害ではないでしょうか。豚肉に熱を加えることでウィルスは死滅するにも関わらず、マスコミ報道だけで豚肉が敬遠されるような状況を目の当たりにしますと、私たち議員は『正しい情報が市民の皆さんに分かり易く伝えられ風評被害を無くすこと』が早急の仕事ではないかと思います。ゴールデンウィーク中も街頭に立ち、京都市の食肉に対する厳しい検査体制を報告させて頂きました。地域住民の皆さん方にとってわかり易く、身近に感じられる政治や行政の実現に頑張ってまいります。

他教団活動紹介　（中外日報４月３０日より）

●浄土三部経　９年かけ英訳完成

浄土真宗本願寺派はこのほど、親鸞聖人が釈尊の「出生本懐の経」として尊重した『仏説無量寿経(大経)』の英訳本『The Three Pure Land SutrasⅡ』を発刊した。平成１５年に『仏説阿弥陀経(小経)』と『仏説観無量寿(観経)』が英訳され、『The Three Pure Land SutrasⅠ』として刊行されており、これで浄土教正依の経典の『浄土三部経』の英訳が完成した。

京都教会　あの日あの時

昭和３４年１２月

１２月５日、待ちに待った京都支部発足式の様子。道場内は会員さんで溢れました。初代教会長(当時、支部長)に諸井角治さんが就任され、あらためて京都教会５０年の歴史がここから始まったのです。

５０年前（１９５９年）の出来事：ミュンヘンで開催中の国際オリンピック委員会が第１８回大会の開催地を東京に決定しました。

庭野平和賞シンポジウム

世界平和について宗教者が話し合う庭野平和財団のシンポジウム「京都発　宗教者の新たなチャレンジ」が９日京都普門館で開かれ、ＨＩＶ・エイズ問題について考えた。

シンポジウムでは今年庭野平和賞を受賞したウガンダのキリスト教牧師ギデオン・バグマ・ビャムギシャ氏(49)のスピーチが代読された。

ＨＩＶ感染者で自らその事実を公表したビャムギシャ氏は「ＨＩＶ・エイズに関する差別や汚名の撲滅には国家間などで献身的な協力関係を築く必要がある」などと訴えた。アフリカ支援に取り組む団体の代表者らによるパネル討論も行われ、ＨＩＶ・エイズの理解を広げるため、患者が感染の事実を公表できる環境づくりについて意見を交わした。

（京都新聞５月１０日記事より抜粋）

仏教を生活に生かす　「日常生活の中の仏さまの教え」

《仏の慈悲を知る　本願》

法華経の如来寿量品(にょらいじゅりょうほん)には「つねに自らこの念をなす　何をもってか衆生をして無上道に入り　すみやかに仏身を成就することを得せしめんと」とありますが、仏さまが娑婆世界に姿を現されるのは、***どうしたらみんなを仏の道に導き入れることができるか、どうしたら早く仏と同じ心境にさせることができるか、***その願いをかなえるためなのです。仏さまのご本願がここにあるのです。

庭野開祖は「私たちのまわりには、いつも仏さまがいらっしゃることを自覚し、そのお慈悲を素直に受け、仏さまのみ心に沿って実践していかねばならない」と、言われました。方便品(ほうべんぽん)には、仏さまは***すべての人を自分と同じ迷いのない仏の境地に導きたい、私たちを安心して一生を送れる幸せな境地にしてあげたいという誓願を立てられた、***と説かれています。また、如来寿量品には、仏さまは、***私たちが何が出来て何が出来なかったのか、どんな苦しみを抱え、それをどう乗り越えようとしているのかをすべて分かったうえで、常にちょうどいい出来事をメッセージとして送っているのだ、***とも説かれています。

そして、少しでも早く、苦労をせずに真っ直ぐに仏の境地になれるよう、さまざまな出会いを用意して下さっているというのです。***佼成会に入ったのは、青年部活動とか、壮年部活動のためじゃないんです。一番の願うところは、本願は、仏になりたい、成仏したいということなのです。***

１９８６年４月、ウクライナのチェルノブイリ原子力発電所が爆発するという大事故が起きました。大量の放射能が各地に広がり、日本でも、野菜や水、母乳などから放射能が検出されました。連日報道されるニュースに、この先どうなるのだろう、生きていけるのだろうかと、みんなが不安な気持ちになったのを思い出される方も多いと思います。

その時、庭野開祖は***「何も心配することはない。私たちは、ただひたすら仏道修行をしていけばいいんだよ。仏道精進あるのみだよ」***と、言われたそうです。原発事故のような、どうすることもできない大惨事に遭ったとき、人間の目にはそこにどんな意味も見出せず、絶望してしまいそうになります。そんな時でも、それでも仏さまの本願を信じ、そこにしっかりと焦点を合わせ、決してぶれることなく生きて行くことが大切だと言い切られたのです。それこそが本当に***「本仏の本願を受け止める」***ということなのではないでしょうか。

仏道修行のいちばん肝心なことは***「生病老死を度す」***ということです。自分が生まれたことからはじまって、生身の体であれば病むこともあります。一年一年歳をとって、最後には死なねばなりません。***「生」***あるものは「***死す」***という、絶対に自分から離れることのない問題を、けっして誰にも責任を持っていかずに解決しておかねばならないというので、仏さまは「***度す」(苦難の橋をのり超える)***という言葉を使っておられるのです。

人は本来皆、仏さまと同じ心を持っていて、それを発揮するために生きています。仏さまは、***私たちを生かそう、生かそう***として、出会いをくださっているのです。それなのに、私たちはつい表面的な善悪にとらわれ、目の前に起こる現象に振り回されて生きています。けれども本当は、すべてが今の私に必要なことなのです。***すべての出来事は、自分本来の仏性(仏と同じ性質)を輝かせるために必要で、まわりは自分が仏になるための、有り難い「縁」ばかりなのです。***

それがなければ、自分の仏性を輝かせることができない、大切な***「はからい」***なのです。すべてを***仏さまのお慈悲だと信じること***です。仏さまのお慈悲を信じることによってこそ、仏さまの本願を本当に受け止めることができるようになるのです。

庭野開祖の宗教観・平和観　「一乗の道」

《リメンバー・パールハーバー》

世界各国からの宗教指導者が集まった京都会議で、いくつもの感動的な出会いを体験した庭野開祖は「この会議を一発花火に終わらせてはならない。ねばりづよく、これを継続していくのがいちばん大事な平和活動だ」と、心にかみしめていた。「これから何度も回を重ねて宗教者が集まり、話し合いを続けて、それぞれの宗教者が何十万、何百万という信徒の力の結束をめざす。その一歩一歩が大切なのだ」それは、京都会議を実現させた同志の共通の思いであった。

京都会議を出発点として、宗教協力による平和活動を推進していく継続期間として「世界宗教者平和会議」（ＷＣＲＰ）が設立されたのも、その考え方からであった。主要国の役員によって国際委員会と国際事務局が設置され、世界の各地に地域委員会、国内委員会が設けられた。日本でも「世界宗教者平和会議日本委員会」を発足させることになった。

この日本委員会が生まれて最初に取り組んだのが、昭和４７年６月、ハワイでの日米宗教者協議会であった。「日本の繊維製品の輸出攻勢でアメリカの繊維産業が危機に瀕している。さらに、オートバイ、カメラなどその５０パーセントもが日本製品で占められている。日本は政府と民間企業が一つになってアメリカに経済戦争をしかけているのではないか」日本の驚異的な経済復興によって輸出が増え、アメリカ政府の高官が公の席でそんな発言をするほど険悪な空気になってきていた。

「危機的な事態を未然に防がなくてはならない。宗教者の力でそれが出来るはずだ」という声が、日米両国の宗教者の間に生まれ、ハワイのホノルルのホテルを会場に、日米宗教者協議会が開かれた。その会議の冒頭で、庭野開祖はまず、日本の宗教者として懺悔（ザンゲ）の言葉を述べた。***「３１年前、日米両国はこの地でいまわしい戦争に突入してしまいました。そして、いままた両国の関係は危機を迎えているといわれますが、私は、決してそうは思いません。アメリカの皆さんが胸に刻みつけている『リメンバー・パールハーバー』(真珠湾を忘れるな)の言葉を、私たち日本人は胸に痛みをおぼえずに聞くことができません。そのことを、私は心から懺悔します。***

しかし、いま同じこの地に集まった私たちは、戦いではなく、平和を作り出そうと真剣に願う同志です。両国間にもしも不幸な事態が生じそうになった時、私たちは、平和の同志が集まった今日の日を忘れてはならないという意味で、『リメンバー・パールハーバー』という言葉を使いたいと思います」

庭野開祖が挨拶を終えると、アメリカの委員会の委員長であるグリーリー博士が立ち上がった。***「庭野委員長の言葉に私は胸をゆさぶられました。アメリカの宗教者として私たちもまた、広島と長崎への原爆投下の罪を、心から懺悔しなければなりません。私は日本の仏教者から、こういう言葉を聞いたことがあります。『私たちが３０年前にあなた方と知り合っていたならば、真珠湾攻撃はなかったでしょう。そして、３０年前にあなた方が私たちを知っておられたら、広島と長崎の恐るべき破壊は起きていなかったでしょう』と言うのです」***

互いの国の実情についての理解不足から生まれる被害者意識が、どれほど大きな誤解を生んでしまうか。国民全体がその誤解による感情的判断に押し流されたとき、どんなに大きな危険が生まれるか・・・・・。それは日米間に限らない。経済的利害の衝突だけでなく、世界に起こる紛争のほとんどが、***互いの理解不足、誤解に基づく感情的判断に発している***ともいえるのではないだろうか。

そうした誤解を説き、相互理解の道を見つけることこそ、宗教者の役割であるはずだ。さらには、人間が人間らしく生きられる世界を建設するための開発援助を含む平和活動もある。そうした平和活動の様々な分野に、宗教協力によって取り組まなければならない問題が山積みしているはずだ。もはや、ただ戦争がないという状態をもって平和とする時代は終わったのである。

かつてウ・タント国連事務総長が***「国家への忠誠心と、人類への忠誠心を」***と言われたことがあったが、祖国愛と人類愛の融合を目指す国際的ルール作りもまた、大切な平和活動であろう。とくにＮＧＯ（非政府機関）活動は、国家による外交の足りない点を補完するうえでも、ますます重要性を増していくのはまちがいない。　（つづく）

渉外部からのメッセージ

この平安月報が皆さまのお手元に届く頃は教会発足５０周年記念団参の最中かもしれません。東京までバスで８時間という距離はまるで自分自身の求道心を試されているかのようです。新幹線で行けば３時間もかからずに到着できるのですが、他の人に声を掛けながら、協力しあって参拝する道中に自分がどこまでこの教えと共にあるのかを身をもって体験できます。明るく、楽しく、ありがたい記念団参報告をお楽しみに。

京都教会のブログに教会長の毎月のことばを掲載しています。http://rkk-kinki.blog.ocn.ne.jp/kyoto/